

第61回国立大学図書館協会総会研究集会 学術情報委員会成果報告サマリー

日 時：平成26年6月19日（木）16：10～17：40
場 所：国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟 小ホール
報 告 者：甲斐 重武（京都大学附属図書館事務部長）

学術情報委員会の平成25年度活動成果として作成された3つの報告書について、甲斐重武京都大学附属図書館事務部長から以下のような概要の説明があった。

(1) 『オープンアクセスジャーナルと学術論文の状況－論文データベースによる調査－』

学術情報流通検討小委員会では、オープンアクセスジャーナル(OAジャーナル)の状況を把握するために、論文データベース Web of Science に収録されている論文のうち、OAジャーナルの掲載論文と一般的な購読ジャーナルの掲載論文との対比を行った。対象の分野は自然科学、時期は2003年～2012年での4時点として分析を行った。

調査の結果、学術ジャーナル数・学術論文数は依然として増加し続けている中で、OAジャーナルの掲載論文数が全体に占める比率は、現時点ではなお小さいものの増大していることが明らかになった。この結果から、今後シェアを拡大していくOAジャーナルの論文掲載加工料(APC)については図書館に限らず大学内外の関係者での検討が必要である。

(2) 『今後のGIFプロジェクトの在り方について（検討結果報告書）』

GIFプロジェクトチームの下に設置したGIFプロジェクト再検討ワーキング・グループは、国公私立大学図書館協力委員会GIFプロジェクトチームと連携して、過去11年間の利用状況やアンケート結果に基づきプロジェクトの評価を行い、今後の在り方について提言を行った。

GIFプロジェクトは、日米及び日韓相互の国際ILLにとって重要な役割を果たし、改善すべき点は存在するものの当面は他に代えがたい必要不可欠なサービスであり、平成29年のISO ILLプロトコル更新に対応したシステム間リンクによって、今後もGIFプロジェクトは維持されるべきであり、関係機関等との協議や調整を行う必要がある。

(3) 『学術情報の利用促進と保存プロジェクトチーム報告』

科学技術・学術審議会学術分科会学術情報委員会が2013年8月に公表した「学修環境充実のための学術情報機関の整備について（審議まとめ）」において言及されているシェアード・プリントについて、欧米の現状と日本で実施する際の留意点をまとめた。

欧米では、複数の図書館が共同でコレクション管理するシェアード・プリントへの動きがあり多様なプロジェクトが進められている。日本で導入するには、コレクションの共同保存・利用の考え方の理解を進めることや、資料選択・費用負担・所有権の移管等の問題の検討が必要であり、図書館コンソーシアムの新たな事業として捉えることも留意すべきである。